vinetur

テデスキ、2026年ヴァルポリチェッラの収穫は減収も品質は良好と発表

8月の降雨と夜間の気温低下がブドウのフェノール類の成熟を促進。収穫は平均より早い9月7日に始まった

2026年11月13日（金）



ヴァルポリチェッラの家族経営ワイナリー、テデスキは10月、夏の暑さや8月の降雨、夜間の気温低下に見舞われた生育期を経て、2026年の収穫はブドウの収量が減った一方、品質には明るい兆しが見られたと発表した。

同社によると、収穫は9月7日に始まった。自社畑の平均より早かったものの、例年と大きく異なる時期ではなかった。ワイナリーの醸造責任者、リッカルド・テデスキは、暑さが一貫してブドウの成熟を早め、収穫時期を前倒しするという単純な展開ではなかったと説明。猛暑の時期には成熟の進み方が鈍ることもあり、夏の早い時期に立てられた見通しが変わることもあったという。

ワイナリーによると、より重要だったのは8月の降雨と、その後の夜間の気温低下だ。テデスキは、この組み合わせが果実のフェノール類の良好な成熟を促したと述べた。フェノール類の成熟とは、赤ワインの色や質感、熟成能力を左右するアントシアニンやタンニンなどの化合物の成熟度を指す。暖かい日が続いた後、気温がより速やかに落ち着く高い丘陵地に自社畑が位置していることも、そ

の効果を後押ししたという。

「収穫が続いている間は予測を立てたくありません」と、リッカルド・テデスキは収穫終了後に発表した声明で述べた。「作業を終え、結果を見てから、全体を振り返るのが私のやり方です」

最終的には「収量は減ったものの、何よりブドウのフェノール類が最適な成熟度に達した」ヴィンテージになったと同氏は述べた。セラーで熟成中のワインは力強い骨格を備えるとみられ、いくつかの点では、熟成に適した赤ワインを生んだとワイナリーが評価する2022年ヴィンテージに似ているという。

テデスキは2026年の生産量がどの程度減ったかを数値で示さず、減少幅が最も大きかった区画や品種も明らかにしていない。ヴァルポリチェッラの生産者が主に栽培するのは、コルヴィーナ、コルヴィノーネ、ロンディネッラで、フレッシュな赤ワインから収穫後にブドウを乾燥させる工程を要するアマローネまで、幅広いスタイルのワインに使われる。ワイナリーによると、収穫したブドウの一部は現在その乾燥工程に入っており、ヴィンテージの全容が見えてくるのは醸造後、ワインによっては長期熟成を経てからとなる。

ワイナリーの初期評価では、香りの特徴も際立っている。ブドウと若いワインには、カシスよりもチェリーやブラックチェリーが明瞭に表れ、スミレの花の香りと、控えめながらはっきりしたスパイスのニュアンスも感じられるという。若いワインは発酵、熟成、ブレンドの過程で大きく変化することがあるため、こうした見立てはまだ初期段階のものだが、生産者や醸造家がこのシーズンをどう捉えているかをうかがう手掛かりとなる。

テデスキは2026年の収穫を、近年多くのイタリアのワイン生産者が指摘している広範な傾向の中に位置付けた。生育期の高温化に加え、春、夏、秋の移り変わりが不明瞭になり、天候の急変がブドウ畑の生育を短期間で左右するようになっているという。そうした状況では、区画ごとの綿密な観察がますます重要になるとワイナリーは述べる。同じアペラシオン内でも、日照条件や標高、土壌の違いにより、暑さや降雨への反応は異なることがある。

区画ごとの管理は、短い距離でも丘陵地の畑の条件が大きく変わるヴァルポリチェッラで、とりわけ重要だ。テデスキによると、2026年のシーズンは、立地の違いが成熟の進み方や、糖度の上昇とフェノール類の成熟のバランスに影響することを示した。実際には、収穫時期をワイナリー全体で一律に決めるのではなく、状況の変化に応じて区画ごとに繰り返し確認しながら判断することになる。

ワイナリーを率いるのは、きょうだいのアントニエッタ、サブリーナ、リッカルド・テデスキと、次世代を担うアントニエッタの息子エンリコだ。家族は収穫に関する声明で、年ごとの予測が難しくなる気候の中、標高や地域に根差した知識、柔軟な対応の価値が今シーズン改めて示されたと述べた。

現在、作業の場はブドウ畑からセラーへと移っている。乾燥させるブドウは状態を確認しながら管理され、ほかのワインに使うロットは醸造の初期段階に進んでいる。ワイナリーは、9月7日以降に収穫したブドウが発酵と初期熟成でどのような結果を示すかを見極めている。